

ストレス現象とハイデガー

—ツォリコーン・ゼミナール(1959-1969年)におけるストレス解釈をめぐって—

伊藤良司*

1930年代、ウィーン生まれのカナダの内分秘学者ハンス・セリエは、ラットに様々な種類の外部刺激（電撃や拘束、寒冷、ホルマリン等）を与えた際、常に一定の反応（副腎皮質の肥大、胸腺・リンパ節の萎縮、胃や十二指腸の潰瘍）が生じることを発見した¹。諸々の刺激の特異性にかかわらず、生体は同一パターンの諸反応を呈する。セリエはこの現象に元来金属工学の用語であった「ストレス stress」という言葉を当てて発表した。後に生理学・心理学・精神医学と多岐に渡り医学界を席卷し、さらには我々の日常会話にまで深く浸透することになるストレス概念の登場である²。

セリエの発見から経ること約三十年。スイスのツォリコーンで精神科医らに向けて定期的にゼミナール（1959-69年）を開催していた晩年のハイデガーのもとに、ゼミナールの主催者であり、当時深い親交にあった精神科医メダルト・ボスからストレスに関する医学的研究の資料が届く。それを読んだハイデガーは返信の手紙の中で、ストレス概念を「自然科学的思考の独裁」に由来する「混乱と無思慮に満ちた魔女の鍋」と評し³、自らの現存在分析論の立場から既存の人間諸科学とは別種の「人間の学」を企図するという課題が急務であると綴った（1966年1月18日）。そして、その約二ヵ月後に開かれたゼミナール（1966年3月1、3日他）で、ハイデガーはストレス現象の現存在分析論的解釈を試みる。

本稿は、こうしたゼミナール、およびに同時期にボスとの間で交わされた対話や書簡等の記録を基に、ハイデガーのストレス解釈の再構成的な提示を目指す。具体的には、まず自然科学的研究との比較から、ハイデガーのストレス解釈の方向性を見定め（第一節）、次いで、彼の解釈の再構成的提示を試みる（第二節）。その一方で、彼のストレス解釈が抱える限界を指摘し、彼の解釈と自然科学的諸研究との架橋のために解決せねばならない問題を提起したい（第三節）。

* 慶應義塾大学文学研究科(哲学専攻)後期博士課程 (db064001@mita.cc.keio.ac.jp)。なお、本稿は「第8回フッサール研究会」(09/03/14-15、八王子セミナーハウス)にて発表されたものを修正加筆したものである。

¹ Hans Selye: A syndrome by diverse noxious agent, *Nature*, 138: 32, 1936.

² H・セリエ『現代社会とストレス〔原書改訂版〕』(杉・田多井・藤井・竹宮 訳、法政大学出版局、1988〔Hans Selye: *The Stress of Life*, MacGraw-Hill, 1956, revised edition, 1976〕) 参照。セリエはこうした生体の非特異的諸反応を「一般適応症候群 (General Adaptation Syndrome: GAS)」とも名づけている。なお、彼は後年、自らが提唱した「ストレス」を生理学的現象に限定せず、より広義に「身体の磨耗(wear and tear)の度合い」とし、それを「何かの要求に応ずる身体の特異的反応」、あるいは「生体のいかなる要求にも対応する非特異的応答」として定式化している〔同書邦訳 15, 83 頁〕。

³ M. Heidegger, *Zollikoner Seminare: Protokolle – Zwiegespräche – Briefe*, hrsg. M. Boss, Vittorio Klostermann, Frankfurt a. M., 1987, 2 Aufl., 1994, S. 342f. なお、以下同書からの引用・参照においては「ZS」という略記を用いる。

第一節 ハイデガーのストレス解釈における考察態度

本節では、自然科学的なストレス研究との比較から、ハイデガーのストレス解釈がとる考察態度を確認する。

セリエの発見した「ストレス」は一般に、生理学的な刺激-反応図式に従って、「ストレス反応」(前掲の身体諸徴候)と「ストレッサー (stressor)」(反応を引き起こす外部刺激)との因果的相関関係として捉えられてきた。ただし、ストレス研究はその後すぐに、当時既によく知られていたキャノンの緊急反応学説(極度の心理的緊張や恐怖等が自律神経系を中心に特定の身体反応を引き起こすこと)と結びついたため、ストレッサーには物的刺激だけでなく心的負荷も含まれることとなる。さらに、過度の慢性的なストレス反応が特定の身体諸器官の機能障害や器質的病変(高血圧や胃潰瘍など)にまで至りうることが確認され⁴、ストレス現象は単なる生理学的現象としてだけでなく、治療が求められる或る種の病態として問題視されるようにもなった⁵。それゆえ、ストレス研究の多くは、こうした症状化の予測と制御を目的に、ストレス現象の発生プロセスの実証的解明へと向けられてきた。

しかし、その際障害となったのはストレス現象の多様性である。というのも、ストレス反応に由来する諸症状が診断されたとしても、その原因となりうるストレッサーには物理的・生理的刺激だけでなく、心理的要因や社会的関係性も含めた無数の可能性が考えられるため、何を決定因子とするかの特定は困難であったからだ。それでも、現代に至るまでストレス研究は、症状化の決定因子となるストレッサーを様々な仕方でも確定し、症状の発生過程の因果的連関を実証的に示すことで、ストレス現象を測定可能な対象ならしめようと努めてきた。例えば、ハイデガーがストレス解釈に取り組んだのとはほぼ同時期、米国の社会学者ホームズと内科医レイらはストレスの尺度化を発表した⁶。彼らは、日常生活の中で大きな変化を引き起こすような出来事(life events)の体験がストレス反応の症状化に関連すると考え、そうしたストレッサーとなる出来事をリスト化した(配偶者の死や離婚や結婚や転居など)。そして、各々の出来事の衝撃の程度を元の生活状態へと回復するのに必要な労力や時間から数量化し(「生活変化単位(Life Change Unit: LCU)」)、それをストレスの

⁴ いわゆる「心身症」と呼ばれるこうした症状を呈する人々の増加は、第二次世界大戦後の米国を中心とした急速な経済発展とともに、人々が仕事面・生活面で過度の負担を強いられるようになったこと(例えば、より複雑化した職場環境や対人関係等への適応を強いられることなど)に起因していると指摘されることもある(林峻一郎『「ストレス」の肖像』、中公新書、1993参照)。それゆえ、「ストレス」は社会学的問題としても関心を向けられてきた。

⁵ こうした心身症的病態の現象学的解釈にあたっては、物的身体(Körper)とは区別される私の身体(Leib)の本質を、知覚経験の構成場面における随意的身体(手や足など)をモデルに、「私が自由に動かせる身体」[IV, S. 114]として規定するフッサール身体論では対応しきれない。というのも、身体を因果性に支配された自然事物の一つとするか、「意識に応じた、私の根源的な自由な運動の器官」[IV, S. 113]とするかの二者択一的な解釈をする限り、ストレス反応やその症状化において問題となるような、物的原因をもたず、しかも不随意的に自ずと症状を呈してしまう身体はそのいずれにも当てはまらないからである。さらに、心身症的症状においては本人に心的負荷の自覚がないまま症状を呈する場合もありうる。こうした、心身症とフッサール身体論をめぐる問題については、本稿に先立って既に詳論した：伊藤良司「構成される心身症」、『現象学年報』第24号、日本現象学会、2008年。

⁶ T.H.Holmes, R.H.Rahe: The Social Readjustment Rating Scale, *J. Psychosom. Research*, 11, pp. 213-218, 1967.

尺度とした（「社会再適応評価尺度 (Social Readjustment Rating Scale: SRRS)」）。こうしたストレス研究の努力の成果は様々な治療法の確立をもたらし、我々はその恩恵を被っている。

しかしながら、ハイデガーの立場からすれば、多様に現れるストレス現象を、その予測と制御という目的から、一定の測定可能な因果的相関関係に確定してしまうことこそ、まさにストレス現象に対する「自然的思考の独裁」に他ならないと言えよう。例えば、彼は晩年の草稿（1966年11月13日）の中で、或る病状が生じた際にその原因と発生過程の解明だけで当該の状態を規定しようとする考察態度を「成因論的な考え方 (genetische Betrachtungsweise)」と呼び、その欠陥を指摘している[ZS, S. 266]。彼によると、「或る病状がどのように生じたかを成因論的に説明しようようになるためには、この病状がそれ自身何であるか前もって明らかにされている必要がある」[ebd.]。すなわち、決定因子となるストレスラーの確定と発生過程の因果的解明を通じてストレス現象をいかに説明しようとも、それによって説明されるべき当の「ストレス」が何であるかが明確にされていなければ、その説明がいったい何に向けられているかもわからないままなのである。説明されるべきものの本質の明示化という前提を飛び越え、測定可能な一定の因果的連関の解明による成因論的な説明だけでストレス現象を規定するならば、それは自らの考察態度や測定方法に適合するもの（数量化可能なもの）のみを「ストレス」として対象化したに過ぎないだろう。確かに、成因論的な考察は数々の治療法の確立をもたらしたが、そのこととストレス現象それ自身が解明されることは必ずしも同じではない。「ストレス」が何であるかは、因果的相関の実証によってではなくそれ自身において示されねばならないのである。それゆえ、ハイデガーのストレス解釈は、「ストレス」それ自身が示すところの多様性（ストレス現象が多様に現れうるということ）を尊重し、その可能性の基盤を問うことで「ストレス」の本質解明を目指す。

さらに、成因論的な考え方には別の欠陥もある。ハイデガーはボスとの対話（1966年3月6日から9日まで）の中で、それを次のように指摘している[ZS, S. 262]。例えば、試験前にひどく緊張し胃が痛くなる。成因論的な考え方に従えば、これは〈これから試験が行なわれることがストレスラーであり、試験が終われば胃痛も消える〉と説明されるだろう。その際、〈試験が行なわれる〉はいわば〈雨が降る〉というのと同じレベルでの単なる「出来事 (Vorgang)」としてしかみなされておらず、「私がそこに関わって在ること (mein Dabeisein)は全く考慮に入れられなくなる」[ebd.]。だが、試験の実施はそれだけで類型化されたストレスラーになるのではなく、それに関わる私の存在において初めてストレスラーとしての意味をもつようになる。すなわち、「ストレス」もまた他ならぬ我々の在り方の一つである。それゆえ、多様なストレス現象の可能性の基盤は、我々の存在（ハイデガーはそれを「現存在 Dasein」と呼ぶ）それ自身の内に求められねばならない。

こうして、ハイデガーのストレス解釈は、多様なストレス現象をその予測・制御のために測定可能な一定の因果的な出来事の継起として対象化しようとする「自然科学的思考の独裁」に対して、「ストレス」という事象それ自身が示す多様性にとどまりつつ、その可能性の条件を現存在の存在構造において基礎づけようとする実存論的解釈として進められる。

第二節 ハイデガーのストレス解釈の再構成的提示

本節では、ハイデガーのストレス解釈を辿り、彼が「ストレス」の可能性の条件を現存在のどのような存在構造の内に基礎づけたか、そして、そこから彼が「ストレス」をどのように規定したかを再構成的に提示する。

ハイデガーはゼミナール（1966年3月1日）の中で「ストレス」を、現存在を規定する「実存範疇 Existenzial」⁷として捉え直し[ZS, S.180]、「ストレスとは、要求 (Beanspruchung)、つまり負担 (Belastung)のことです」[ebd.]と解することから自らの解釈を出発させる⁸。さらに、その二日後のゼミナールにおいては次のように述べられる。

ストレスとは要求のことであり、それもさしあたっては過剰な要求のことです。要求は一般にその都度何らかの仕方で応ずること (Entsprechen)を求め、これには応じないとか応ずることができないといったことも欠如態として属しています。[……] 要求という語は、事象をただちに脱自的な人間存在の領域へと、つまり、私たちに話しかけてくる(ansprechen)ものについて、それが云々だと言われうるような領域へと導き入れます。[ZS, S.185、□ は引用者]

ここからは、彼が「ストレス」を脱自的な人間存在における呼-応関係から解釈しようとしていることが読み取れる。では、この呼-応関係とはいかなるものだろうか。

再び3月1日のゼミナールに戻ると、ハイデガーはストレス現象の多様性を、「要求」がいつも「そのつどの事實的 (faktisch)⁹な世界-内-存在」へと方向づけられていることに基づくものとして解釈している[ZS, S.181]。そして、この「要求」を話しかけられた「そのつどの事實的な世界-内-存在」を、我々は日常的に「調子 (Befinden)」として表明しているとされる。例えば、日常会話において、ストレスは「調子はいかがですか (Wie befinden Sie sich?)」や「どんな具合ですか (Wie geht es Ihnen?)」といった仕方で尋ねられたり、それに答えたりする。このとき「調子」は、必ずしも「体調 (das körperliche Befinden)」だけに限定されず、より広く「好調 (Wohlbefinden)」や「不調 (Mißbefinden)」を指す[ZS, S.182]。こうして、自然科学的にはストレスサー (刺激) と物的身体の諸徴候 (反応) という存在的な二項間の因果的連関として説明されてきたストレス現象を、ハイデガーは話しかけられる「要求」とそれに応じて表明される「調子」(体調や機嫌の良し悪しなど) という「そのつどの事實的な世界-内-存在」における実存論的な呼-応関係として解釈する。

⁷ ハイデガーは現存在の存在性格を規定する諸概念を「実存範疇」と呼び、現存在ではない他の存在者を規定する「カテゴリー」とは区別する (M. Heidegger, *Sein und Zeit*, Tübingen: Max Niemeyer, 18 Aufl., 2001, S. 44 参照)。

⁸ ここでハイデガーは奇しくもセリエと同じく (前掲注2 参照)、ストレスを「要求」と読み換えている。ハイデガーがセリエの規定を踏まえていたかどうかは不明だが、少なくともハイデガーの解釈の出発点は自然科学者たちに違和感を与えるものではなかったと言える。

⁹ ここで「事實的 (faktisch)」と言われるときの「事実性 (Faktizität)」とは、現存在が「それがとにかくあり、そしてあらねばならない (Daß es ist und zu sein hat)」という仕方で自らの「現 (Da)」の中へと投げ込まれて存在していることの実事性 (実存範疇) であり、現存在はまさにその事実を自らの存在として存在せざるをえないという点において、他の存在者がただ眼前に在ることの客体性をもつカテゴリー的な事実性格 (Tatsächlichkeit) とは区別される (前掲書 *Sein und Zeit*, S. 56, 135 参照)。

ハイデガーは続けて、個々の「調子」の表明を可能ならしめる現存在の存在構造を、「情態性 (Befindlichkeit)」や「了解 (Verstehen)」といった『存在と時間』以来の用語を用いて次のように述べる。

それ〔情態性〕は、現存在が世界や共にある人々の共同現存在 (Mitdasein der Mitmenschen)や自己自身へとそのつど関わるにあたって、現存在を規定〔気分づけ〕(be-stimmen)している気分性 (Gestimmtheit)のことです。情態性はそのつどの好調や不調を基礎づけていますが、他方でそれ自身もまた、人間が存在者全体に曝されていることに基礎づけられています。それとともに既に、存在者全体に曝されていること (被投性 (Geworfenheit)) には、存在者を何らかの存在者として了解すること (Verstehen) が属しているということが言われています。しかし同じようにして、もはや被投的でないようないかなる了解も存在しないのです。[ebd.、〔 〕は引用者]

すなわち、「情態性」とは、我々が何かと関わる際にそのつど気分づけられた仕方で自らを見出しているという存在性格である。そして、我々がこのように気分づけられた仕方で存在するのも、現存在には「存在者全体に曝されている」という「被投性」の構造が備わっているからである。ただし、それは存在者全体 (現存在自身もそこに住まう世界) に、ただ曝されているだけなのではなく、その全体において分節的に個々の存在者を存在者として既に「了解 (Verstehen)」している。逆に「了解」もまた常に既に被投的である (存在者全体に曝されていることなしには、そこから分節的に存在者を了解することはできない) ため、「被投性」と「了解」は、どちらか一方が他方に先立つことはなく、共属的に現存在に備わっている存在性格である。

さらに、この被投性と了解は現存在のもう一つの存在性格である「言語 (Sprache)」¹⁰において共属的に統一されるため、「ストレス」も「言語」から解釈されることとなる。

言語はここでは、そこにおいて存在者が存在者として、つまり存在することへの着目から示されるような〈語ること (Sagen)〉として考えられねばなりません。語り(Sage)としての言語を通じて被投性と了解が共属していることに基づいて初めて、人間が存在者から話しかけられうるのです。しかも、この話しかけられうること (Ansprechbarkeit)が、負担であれ負担の除去であれ、要求〔ストレス〕が可能であるための条件なのです。[ZS. S. 182f.、〔 〕は引用者]

ハイデガーの主張する「言語」とは、発声や筆記文字のことではなく、また特定の存在者に関してその性質 (色や形など) が何であるかを伝えることでもない。それは、存在者をその存在において存在者として語ること、つまり、そもそもそれが在るということを示すこと (Zeigen) [ZS, S. 185]である。そして、先に「被投性」と「了解」とに区別して捉え

¹⁰ 『存在と時間』においては、情態性 (被投性) と了解の共属的統一を規定するのは「話 Rede」とされ、「言語 (Sprache)」は「話」が語り明かされている表現態とされている。ただし、「話」は現存在する存在者に属するため、実存論的には「言語」として存在するとも述べられる (前掲 *Sein und Zeit*, §34 参照)。

られた現存在の存在構造は、こうした存在者の存在現示という「言語」の構造において統一的全体としてまとめ上げられる。また、ハイデガーによれば、こうした存在現示としての「言語」が存立できるのは、他の存在者に対して根源的に「開けてありうること (Offenbarkeit)」[ZS, S. 183]という脱自的構造を備えた人間存在だけである¹¹。この脱自的構造によって、我々は常に既に曝されている存在者全体から「話しかけられうること」が可能となり、さらには話しかけられた「要求」に応じて、そのつど「私がそこに関わって在る」ような個々の存在者を何らかの存在者として分節的に「了解」し、各々の了解を気分づけている「調子」を表明することが可能となる。

したがって、ハイデガーは人間存在がその脱自的構造において存在者から「話しかけられうること」を「ストレス」の可能性の条件と解釈し、それを情態性 (被投性) と了解の共属的統一、すなわち、〈話しかけられ-言い示す〉という「言語」の実存論的構造において基礎づける。このように「言語」的に解釈された実存範疇としての「ストレス」の根本性格を、ハイデガーは「話しかけられること (Angesprochenwerden)の要求」[ebd.]と規定する。次の発言は彼の実存論的なストレス解釈を総括している。「ストレスは、要求と応ずることの本質に関連に、すなわち、事物たちと「話すこと (Sprechen)」も含む広い意味での会話 (Gespräch)の次元に属しています」[ZS, S. 183]。

また、このように再構成的に提示されたハイデガーのストレス解釈は次のように評価できる。彼の批判に従えば、自然科学的考察は多様なストレス現象それ自身を問わず、〈測定可能とされる何らかのストレス〉と〈それによって引き起こされた物的身体に呈される諸症候〉という予め想定された二つの存在者 (あるいは存在的出来事) の間の一方向的因果関係において非人間的に対象化し、成因論的に説明してきた。それに対して、ハイデガーはストレス現象を我々が曝されている存在者全体からの「要求」に応じてそのつど存在者が際立ち現れてくるという、いわば現存在における存在者の存在者化の構造において解釈することで、ストレス現象を「人間的状況 (menschliche Situation)」[ZS, S. 263]の内に取り戻したのである。

第三節 ハイデガーのストレス解釈の限界

前節において、多様なストレス事象の可能性の条件を人間存在の実存構造の内に見出すことを目指したハイデガーのストレス解釈が再構成的に提示された。しかし、この実存論的解釈をもって、自然科学的諸研究が完全に補完されたと言えない。ハイデガーのストレス解釈もまた、彼の実存論的思考態度に起因する限界性を孕んでいる。いったい、実存論的解釈によって基礎づけられたストレス概念はストレス現象をめぐる個々の臨床的場面にどのように貢献しうるのだろうか。ハイデガーはその点を明示できていない。それゆえ、彼の解釈成果はストレスに関する医学的諸研究との接続を欠いたままである。そこで本稿は最後に、ハイデガーのストレス解釈の難点を指摘し、彼が企図した自然科学的諸研究と現存在分析論に依拠した「人間の学」の架橋のために解決しなければならない問題の一つを提起したい。その際、手がかりとなるのは前掲の引用 (本稿第二節冒頭参照) にてハイ

¹¹ ハイデガーは『存在と時間』において既に、「人間は話をする (reden) 存在者として姿を現わす」と規定している (前掲 *Sein und Zeit*, S. 165)。

デガーが述べていた「過剰な要求」という言葉である。

ところで、ハイデガーはストレスを「要求」もしくは「負担」として解釈することから出発したが、これまでの議論は主に「要求」に関するものに集中していた。しかし、一般に医学が注目するのはむしろ、我々の生命を疲弊させ、時に深刻な身体諸症状をも引き起こしうる有害な「負担」としてのストレスの方である。もちろん、こうした「負担」としてのストレスも一定程度内であればかえって生命維持的に働きうることは広く実証されている。では、ハイデガーはこうした二面性をもった「負担」としてのストレスをどのように解釈しているのだろうか。

まず、ストレス＝負担の「生活必要性 (Lebensnotwendigkeit)」[ZS, S. 180]に関して言えば、前節で提示されたハイデガーの「要求」としてのストレス解釈の内にその可能性の基盤をすぐに見出せよう。というのも、前述のように、ストレスが「会話」としての現存在の世界-内-存在構造に基礎づけられた「話しかけられることの要求」であるなら、人間存在はその構造からして既に常に自分自身それでない存在者によって話しかけられてしまっているのであり、「この〈話しかけられて在ること (Angesprochensein)〉なしには、人間は実存 (existieren) しない」[ebd.]。つまり、人間が実存しうるためには、それが脱自的に「話しかけられて在る」のでなければならぬのである。それゆえ、ハイデガーは「こうした〈必要不可欠な (notwendig) 話しかけられて在ること〉という意味で、「負担」は「生活」を維持するものなのです」[ebd.]と主張する。人間存在がそもそも「話しかけられて在ること」という存在構造に支えられている以上、「負担」とも解されるストレスは人間存在の実存を維持するものとして働きうるのである。

このことからハイデガーはさらに、自然科学的諸研究が報告しているようなストレスを取り除くこと、すなわち「負担除去 (Entlastung)」も一種の負担となりうるという事態についても解釈を与えている。例えば、負担から解放されたはずの戦地からの引揚者や試験合格者や定年退職者といった人々が、その負担除去によってかえってまた或る種の負担を背負うることがありうる。ハイデガーはこのような事態を先のゼミナール (1966年3月3日) の中で次のように解釈する。

わたしたちは必ず何らかのあり方で要求され、語りかけられているのです。負担除去というのは、一切の要求が欠落するという意味での〈要求に-被られて-在ること (In-Anspruch-genommen-sein)〉の単なる否定ではなく、要求されて在ることのもう一つ別の、それどころか顕著なありかたなのです。〈常に要求に被られて在ること〉の範囲内で、そしてそれに依拠して、負担除去ということもある (es gibt) のです。負担と負担除去とは、人間が脱自的に外へと引き出されて在ること (ekstatisches Ausgespanntsein) によってのみ可能なのであり、これは〈要求に-被られて-在ること〉の二つの異なった様態なのです。[ZS, S. 187]

だが、負担除去も「要求に-被られて-在ること」の様態だと言うなら、それは依然として人間存在の実存を支えているはずである。それにもかかわらず、いったいなぜ我々は負担除去によって苦しみ、病むのだろうか。そのことについて、ハイデガーは「荷おろし鬱病 (Entlastungsdepression)」[ebd.] と呼ばれる事例を挙げて次のように解釈する。

例えば、定年を迎えた人は、確かに職業上の仕事からは要求されていませんが、しかしこの先も実存し続ける人間としては依然として要求へと差し向けられ、この要求が彼を求めずにはおかないのです。職業上の義務が欠落して要求されることがなくなっても、要求へと差し向けられているということはなくなりません。この要求への差し向けは、充足されない、空虚な差し向けとしてかえって存続し、そのようなかたちでただならぬ、過剰な要求となるのです。[ebd.]¹²

また、上の解釈が披露されたゼミナールの後、ハイデガーはボスとの対話（1966年3月6-9日）の中で次のように述べている。

負担除去が負担になるというのはむしろ、絶えず話しかけられて在ること (Angesprochensein) がもはや話しかけてこないということです。そのとき、世界的なもの (das Welthafte) が取り除かれ、わたしはもはやそれに支えられることがなくなり、途方に暮れる (ratlos) のです。[……] 本質的に話しかけられて在るという本質特徴が、負担除去において脅かされます。これは話しかけられて在ることの一つの欠如態 (Privation) です。[ZS, S. 261f.、〔 〕は引用者]

これらのハイデガーの発言から、〈負担除去による負担〉という事態は次のように言える。〈負担除去による負担〉は「過剰な要求」と解される。仮に既に存在者として了解された個々の特定の要求から解放されたとしても、人間存在の構造としての呼-応関係それ自身は彼が実存し続ける限りなおも続く。だが、存在者全体に曝されそこから話しかけられ続けていても、その話しかけを特定の存在者（「世界的なもの」として了解してそれに応ずることができない場合、この「話しかけられて在ること」は充足を欠いた空虚な「要求への差し向け」となって彼に迫り続ける。それゆえ、「絶えず話しかけられて在ることがもはや話しかけてこない」とは、単に〈存在者全体からの話しかけ〉が消失することではなく、絶えず話しかけられ続けて在ることに応ずる手段 (Rat) を失ってしまっている (los) ために、彼の人間存在としての実存を可能ならしめるはずの「会話」が事実的に存立しないことである。そのとき、彼は共属的な呼-応関係における「会話」の構造としての自らの実存に応える手立てのないまま剥き出しにされ、実存し続けていることそれ自身が「過剰な要求」（＝「負担」）となって、彼を苦しめ続けるのである。

『存在と時間』でのハイデガーは、現存在構造を「ゾルゲ (Sorge)」として総括し、それを「(内世界的に出会う存在者) のもとでの存在として、(世界) の内に既に、自ら先立って在ること (Sich-vorweg-schon-sein-in-(der-Welt-) als Sein-bei (innerweltlich begegnenden Seienden))」¹³ として規定した。ここでの「…の内に既にある存在 (das Schon-sein-in-…)」は「被投性」に、「おのれに先立つ存在 (das Sich-vorweg-sein)」は「了解」にあたり、両者は共属的に「…

¹² 加えて、ハイデガーは負担除去が「退屈 (Langeweile)」と「共同相互存在 (Miteinandersein)」の現象に関連していることと述べ、そのことについてゼミナールでも立ち入って扱ったようだが、残念ながらその記録は残っていないため、本稿ではそれに関して詳細を追うことはしない。

¹³ 前掲 *Sein und Zeit*, S. 192。

の内に既に自ら先立って在ること」として結び付けられている。しかし、「ゾルゲ」はそれだけでなく、「…のもとでの存在 (das Sein-bei…)」、すなわち「頹落 (Verfallen)」もその構成契機として含む。先の〈負担除去による負担〉、つまり「世界的なもの」の支えの喪失とはこの「…のもとでの存在」の喪失であり、それは「頹落」しないままに在る実存のことである。そのとき、人はその実存の「過剰な要求」による「負担」に耐え切れず病むのである。ハイデガーはストレスを実存範疇として捉え直した際、それがとりわけ「頹落」に関係するとほめかしている [ZS, S. 180]。ストレスと「頹落」の関係の詳細はゼミナールの記録として残されていないが、本稿はそれを次のように解釈する。すなわち、実存範疇としてのストレスとは、「会話」としての現存在の世界-内-存在構造に基礎づけられた「話しかけられることの要求」のことであり、それによって人間存在の実存が可能となるのだが、その反面、実存する人間存在がこの「要求」から「頹落」しない、つまりこの「要求」をその都度の「世界的なもの」の要求へと変換し、その「もとで在ること」がなされない場合には、それは実存を可能にする「過剰な」構造によって強いられる「負担」として彼に襲い掛かるのである。ハイデガーのストレス解釈の中にわずかに登場する「過剰な要求」という語は、こうした現存在の実存論的構造に潜む或る種の病巣の可能性を示唆している。

そうであるならば、さらなる問題はこうした〈要求の過剰さ／滞りなさ〉の境界線である。「世界的なもの」が喪失する／しない、すなわち、「頹落」する／しないといったことはいったい何によって決まるのか。なぜ、我々は「要求」に応えたり／応えられなかったりするのか。ハイデガーのストレス解釈はその実存論的考察態度によって、「ストレス」という事象の可能性の条件を人間存在の現存在構造に見出してみせた。だが、人間存在の実存を可能ならしめるはずの「ストレス＝要求」に我々はどのようにして病むのか。ハイデガーのストレス解釈が医学的研究の対象となる個々のストレス現象の臨床的場面にも活用可能な実効性をもつと断言するためには、彼の解釈を基にして「ストレス」が病へ至る症状化の過程も示されねばならない。本稿はその青写真を「過剰な要求」という語への注目から描いてみたが、それでもなお上述のような境界線・尺度にかかわる問題を抱えている。自然科学的諸研究と現存在分析論に依拠した「人間の学」の架橋のために解決しなければならない問題の一つとしてハイデガーのストレス解釈の再構成的提示から浮かび上がったのは、こうした実存範疇としてのストレスの境界線・尺度に関する問題である。

ハイデガーはこの問題を看過してはいなかった。彼はゼミナール (1966年3月3日) の中でプリュッケによる子供の騒ぎ声の例¹⁴を挙げ、或る人物にとって音声刺激としては大差なく測定されるような子供たちの騒ぎ声であっても、自分の子供たちの騒ぎ声であれば、「その子供たちが自分の子供であることをあるがままに受け入れ、自分の子供である彼らと一緒に自分の家という世界にいるから」 [ZS, S. 186] 気にならないのに対して、近所の腕白小僧たちの騒ぎ声は「彼らが〔自分の〕子供であることに呼応しないから、うるさいと思う〔うるさい気持ちを要求される (beansprucht werden)〕」 [ebd.] と解釈した上で、実存範疇としてのストレスの尺度に関して次のような発言を残している。

ここから明らかになることは、要求 (正しく理解されたストレス) は全く別の尺度で

¹⁴ H. Plügge: *Wohlbefinden und Mißbefinden*, Tübingen, 1962.

測られねばならないということです。すなわち、どのような仕方で私たちが何らかの要求に前もって応ずるか、また応ずることができるか、つまり、世界や隣人や自分自身に対する私たちの実存的な関わりがどのように規定されているかという点から測らなくてはならないのです。[ZS, S. 186f.]

確かにここでは、実存範疇としてのストレスの尺度が〈我々が世界や隣人や自分自身からの要求に前もって応ずる、その実存的な関わり方〉にあると示唆されている。しかしながら、その詳細は不明なままであるため、ハイデガーは彼の解釈したストレス=要求の尺度の問題に十分応答できていない。そもそもいかにして我々が或る要求に関しては前もって応じたり応じなかったりするのだろうか。本稿が提示したハイデガーのストレス解釈はその実存論的考察の方向性によってストレス現象の可能性の条件へと遡ってはいるが、その遡られた可能性の条件から再び個々の具体的な臨床的場面へ帰還することを未だ果たせていない¹⁵。だが、こうした問題についてはさらなる考察が必要であるため、本稿は指摘にとどめ、稿を改めることとしたい(了)。

¹⁵ハイデガーの現存在分析論の医療領域への応用を目指す研究として、P.ベナーとJ.ルーベルによる看護論(『現象学的人間論と看護』、難波卓志訳、医学書院、1999 [Patricia Benner/Judith Wrubel: *The Primacy of Caring: Stress and Coping in Health and Illness*, Addison-Wesley, 1989])は注目に値する。彼女らは、ハイデガーの現存在分析論の中に「人間とは己れを解釈する存在である。つまり予め決められた姿を持って世界に参入するのではなく、人生を生きていく中で次第に自らのあり方を定義されてゆくのが人間である」[邦訳 47 頁]という人間観を読み取り、それを看護の臨床場面に不可欠な立場として重要視する。こうした人間観に基づいて、彼女らは「ストレス」を、単なる刺激-反応関係としてではなく、「人に円滑な生活の営みを可能にしていた意味ないし理解(自己理解および世界理解)に攪乱が生じた結果、危害や喪失、試練が体験され、そこから悲嘆の情が誘発されたり、状況の再解釈や新しい技能の習得が要請されたりすること」[邦訳 65 頁]と定義する。この定義は〈我々の実存的な関わり方〉からストレスを測るよう主張するハイデガーの見解と親近性をもっているが、残念ながら前掲書は本稿が取り上げたハイデガーの晩年の記録に一切言及しておらず、この定義も、現代米国の心理学者ラザルスの研究に負うとされる。なお、ラザルスは、ストレス反応の症状化の過程の決定因子は〈直面した出来事をどう評価し対処するか〉という点にあるとして、「コーピング(coping)(心理的対処行動)」概念を提唱し、その統計的類型化からストレス現象の測定を試みている。